

Jung のタイプ論に関する研究

——文献的展望——

河 合 隼 雄

The Study of Jung's Typology : A Review of the Literature

KAWAI Hayao

1. は じ め に

Carl Gustav Jung は、深層心理学の領域において大きい業績を残した人であったが、一般の心理学においてはあまり評価されなかった。特にアメリカにおいては、同じ深層心理学者である Freud が、相当、アカデミックな心理学に取り入れられているのとは対照的に、Jung はあまりかえりみられなかった。このような傾向は、1970年頃から変化を見せ、Jung に対する一般の関心はだんだんと高まってくる。このような点には今回は触れぬことにして、Jung が多少とも一般心理学に取り入れられていた点に注目してみると、それは、彼の数ある業績のうちで、言語連想実験と、内向性—外向性に関する概念に関するもののみであったとすることができる (Hall & Nordby, 1973)。

Jung が、Psychologische Typen (心理学的タイプ) を出版したのは1921年である。英訳ユング全集の編者の言によると、同書は1950年までに、スイス版は7版におよび、15000部が印刷され、Baynes による英訳版は、22000部が売れたと言う。それはオランダ語、フランス語、ギリシャ語、イタリア語、ポルトガル語、ロシア語、スペイン語、スウェーデン語、日本語（日本語は一部訳）に訳されている。このように、Jung のタイプ論は一応、一般によく知られており、心理学や精神医学の教科書にも記載されているが、Detloff も指摘するように、その記述はあまりに簡略にすぎ、深く理解されているとは思えない (Detloff, 1972)。Jung による内向—外向の定義には少し触れてあるにしろ、彼の考えた4つの心理機能については、ほとんど述べられていないし、タイプを考える上で重要と思われる、意識と無意識の補償作用という点には言及されていないのである。

ところで、Jung の後継者であるユング派の分析家たちの間ではどうかと言うと、その人たちの間でも、タイプ論はあまりもてはやされていないのである。ユング派の人ではないが、Storr が“Jung”という書物のなかで、外向—内向に関してはともかく、「四機能の分割は、最もひたむきなユンギアンを除いて、誰からも捨てられてしまい、そのような人さえもほとんど用いていないのではないかと私は思っている」(Storr, 1973) と述べているのは、少し極端すぎるが、確かに、Jung の他の諸概念に比して、タイプの考えはそれほどユング派の間で重視されていないことは事実である。このような点もあって、ユング派のタイプ論に関する一般的な姿勢を知るた

めに、J. of Analytical Psychology の編集者が、ユング派の分析家に対して、タイプ論に関する調査を行った。その結果は Plaut (1972) によって発表されているので、それを少し紹介しておこう。質問の第1項目は、分析の実際においてタイプ論は有用であるか、であり、この答は、①しばしば、②ときどき、③ほとんど、用いない、の3件法の選択である。調査に応じた173名の分析家のうち、①、②、と答えたものは92名(53%)であった。これは、Storr が強調するほどではないが、ユング派の人としては、低い数字であると感じられる。つまり、タイプ論を有用とするかしないかは、大体半数に分れると言ってよい。この調査項目は、分析家自身のタイプ、およびその判断の確実性などを含むが、その点は後にまた述べるとして、第6項目の、Jung の仕事全体のなかで、タイプ論をどの程度に評価するか、という点をみてみよう。これに対して、第一級の重要性をもつとするものは、46名(35%)であった。ところで、興味深いのは、これに関連する項目で、Jung のタイプ論が寄与しているかどうかという判断において、分析の実際に対して寄与していると答えたものは61名(46.5%)であるのに対して、一般心理学 (general psychology) に対しては、80名(75%)と高い数値を示していることである。つまり、ユング派の分析家たちは、Jung のタイプ論は、一般心理学に大きく寄与したと認めながらも、自分たち自身としては、それほどどの関心をもっていないのである。

以上の傾向に対して、Jung の弟子のなかで第1人者と言ってもよい、Meier がタイプ論研究の重要性を強く主張しているのが興味深い (Meier, 1970, 1971)。Meier はタイプ論の重要性を指摘するにあたって、「個性化 (Individuation) はタイプ論に始まり、タイプ論に終る」と明言している。個性化とは、人間の内面的な発達過程を示すユング派の用語で、ユング派の人にとって最も重要なことである。そもそも Jung が1921年に、Psychologische Typen を出版したとき、Meier はそれが個性化過程と深く関連することを指摘し、残念ながらその点を多くの人が見逃していることを Jung に告げると、彼は大変喜んだと言う。そして、Baynes による英訳本には、Psychological Types or Psychology of Individuation というタイトルがつけられたのである。Meier はまた、タイプ論が一般心理学において受けいられていることにも注目し、ユング派の人々があまりにも内向的で、他の学派の人やアカデミックな心理学とのつながりを失い勝ちであると指摘し、タイプ論に基く自然科学的な方法論による研究を盛んにすることによってそれを回復してゆくことが、現在のユング派の使命であると述べている。

アメリカにおける著名なユング派の分析家 Wheelwright (1972) も、タイプ論の重要性を指摘している。そのなかで、彼が自分のタイプを外向性直観・感情型であると述べているのが興味深い。後にも明らかにするように、ユング派の分析家は圧倒的に内向性直観型が多く、このような人は実験的、数量的な研究に無関心であったり、下手であったりするので、どうしてもタイプ論に関する研究がおろそかになり勝ちであり、この点を克服してゆくべきだと言うのである。Meier, Wheelwright らのすすめもあってか、最近ではタイプ論に基づく数量的研究に興味深いものが出現し始めている。筆者も Meier らと同意見であるが、本稿においては、ユング派のタイプ論に関する文献的展望を行いつつ、筆者の考えもそこにいれこんで論じてゆこうとするものである。ただ、文献の紹介はなるべく最近のものに重点をおきたいと思っている。

上記の統計にも示されるとおり、ユング派の半数の人がタイプ論に興味をもたぬのは事実であり、ユング派の著名な年刊誌 “Spring” には、過去10年間にわたって、タイプ論に関する論文が

皆無であり、このことも特筆しておくべき事実であると思われる。世の中がすべて外向性に傾いているときに、Meier らの主張とは逆に、内向性の重要性を強調してゆくことこそユング派の使命であるとも考えられるわけである。

2. Jung の考え

Jung がタイプ論を完成させていった過程については、Jung 自身もいろいろと述べているが、Meier (1971), Fordham (1972) などにも興味深い事実が述べられている。それらについては後に触れるとして、Jung のタイプ論を極めて簡略に示しておくことにする。

Jung は人間の基本的態度として、外向性と内向性という対立した方向性を考え、前者の場合は、個人の心的エネルギーが外界へと向うのに対して、後者では内界へと向うとし、「前者は客体とのある種の積極的な関係によって、また後者は客体との消極的な関係によって特徴づけられている」と述べている。(Jung, 1921) 外向—内向の基本的態度とは別に、各人はおのおの最も得意とする心理機能をもつと考えられ、それは、思考 (Denken, thinking), 感情 (Gefühl, feeling), 感覚 (Empfindung, sensation), 直観 (Intuition, intuition) の4機能に分けられる。

これらについての Jung 自身による簡明な説明を引用すると、「これら4つの機能のタイプは、意識がその経験の方向づけを得る明らかな方法に対応している。感覚（つまり、感覚知覚）はわれわれに、何かが存在していることを告げ、思考は、それが何であるかを告げ、感情は、それが快感を与えるかどうかについて告げ、そして、直観は、それがどこから来てどこへ行くのかを告げる」(Jung, 1964) ということになる。これらは、図1に示すように、思考と感情が対立し、直観と感覚が対立して、それぞれが直交する構造をもつと考えられる。ここに、感覚と直観は、まず何かを

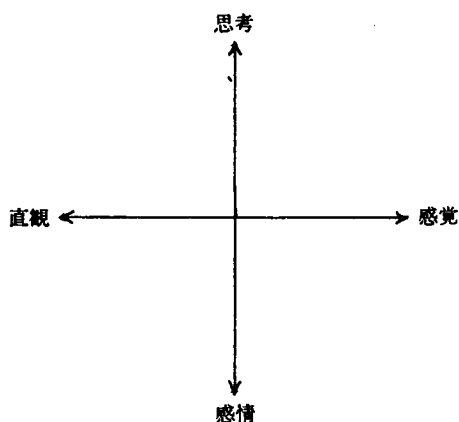


図1 心理機能

自我=意識のうちに取り入れる機能であるのに対し、思考と感情はそれに対して何らかの判断を下す機能であるとも考えられる。事物の色や形、あるいは何の思いつきは、まったく文句なしに存在するが、思考や感情はそれについて概念規定を与えたり、良し悪しを判定したりする。このような意味で、Jung は、一やや、誤解を招きやすい命名と思われるが一思考と感情を合理機能、感覚と直観を非合理機能とも呼んでいる。

各個人はこれらの機能のうちのどれを得意としており、それをその人の主機能 (Hauptfunktion, main function) と呼ぶ、主機能の対となる機能が、その人にとっては不得意で未分化な機能であり、それは劣等機能 (Minderwertige Funktion, inferior function) と呼ばれる。この4機能と、前述の内向—外向の基本的態度とが組み合わせられ、理論的には、それぞれ、外向的思考、外向的感情、外向的感觉、外向的直観、内向的思考、内向的感情、内向的感觉、内向的直観、の8つのタイプが考えられる。ユングはこれらのタイプについて、その特徴を記述しているが、その点については省略する。

ユングの理論の特徴のひとつは、意識に対する無意識の補償傾向ということを常に考えていたことである。すなわち、外向的な人は無意識的には内向的傾向をもち、それによって補償されている。あるいは、思考型の人は無意識的には感情機能が働いている、などと考えるのである。このような個人の無意識内の傾向は、何らかの状況でその人の自我のコントロールが弱まるときに露呈されて、他人を驚かすことになる。たとえば、極めて内向的な人が酒を飲むと外向的な行動をとったりすることに、それは示されることがある。このような、意識と無意識の相補性によって、人間の心が全体性をもつという考えは、彼が後年になって重視した自己 (Selbst, self) の概念の前駆をなすものである。このことのみでなく、Psychologische Typen は多くの点で、彼のその後の理論の発展の萌芽を含むものとして、極めて興味深い著作であると考えられる。

Jung の考えを略述したので、彼がこのような理論をつくり出すに至った過程について述べてみたい。彼が外向—内向の基本的態度の差に注目した最初の基礎は、言語連想実験によるものである。既に、1904年に Jung は Riklin との共同研究による言語連想実験に関する論文において、彼は言語連想のときに、自己中心的で主観的な反応をするグループと、非個人的で抽象的な反応をするグループがあることを認め、前者はヒステリーの患者に特徴的であり、後者は精神分裂病者に特徴的であることを見出した。このような精神病理的な観点からのみではなく、一般人に対してもこのような分類が可能であると彼は考えるようになり、William James による tough-minded と tender-minded の分類をも参考にして、結局はすべての人間に通じる外向—内向の軸を考え出したのである。彼はまた、当時はっきりとした対立を示した Freud と Adler の理論の相違に対しても、Freud の理論は外向性、Adler の理論は内向性の理論であると考えたのである。(これは理論構成がそうであるというのであって、彼らの人間がそうだとするのではない。)

Jung は1913年にミュンヘンにおいて開かれた精神分析学会において、はじめて上記のような考えに基づいてタイプ論を発表した。この説は Freud と Adler の説を相対化し、Freud の絶対性を破るものであったので、彼は怒りのあまり失神し、Freud と Jung の分離の原因ともなったのである。その結果、Jung のこの発表はドイツ語で出版されず、1913年、Archives de psychologie にフランス語で発表されたのである。(現在、独訳、英訳がその全集第6巻に収録されている。)

Jung は彼の自伝のなかで、彼の Psychologische Typen について、「この仕事はもともと、Freud および Adler と異なっている私の見解の位置を明らかにする必要から生じてきたものである」と述べている。彼は両者の中間にいて、どちらの説に対してもその妥当性を認めることができたのである。同一の事象に対して、それぞれに妥当な異なる説明が生じるということはどうしてなのか。この問題に答えようとして、彼はタイプという考えをもつに至ったのである。なお、彼自身のタイプをどう考えていたか、という点については、Jung 自身は自分を内向的思考型と考え、感情機能が彼の劣等機能と考えていたようであるが、van der Post は内向的直観型ではないかと述べており (van der Post 1976)、多くの彼を知る人も、むしろそれに賛成のようである。後にも明らかにするように、ユング派の分析家に、自らを内向的直観型と判定する人が多いことを考え合わせると、興味深い事実である。

Jung は既述のように、外向—内向に対して精神病理的には、ヒステリーと精神分裂病をあて

はめて考えていたが、後には考えをあらためて、ヒステリーと精神分裂病では病的な次元が異なっており、むしろ、ヒステリーと神経衰弱 (Neurasthenia) を対応させるべきだと考えるようになった。なお、4つの機能についても、始めは感情と思考の対立のみを考え、感情は外向性、思考は内向性と考えていたが、後に、直観—感覚の軸を導入し、これらの機能は、外向—内向の基本的態度とは独立であると考えられるようになった。

Jung の Psychologische Typen は、彼がタイプ論をつくりあげていった基礎として、歴史的な事実や文献などを網羅して論じているので、極めて興味深い。今回はタイプに関する最近の研究を主として紹介したいので、その点は省略することにする。なお、同書においては、相補性、心の全体性の考えがみられると共に、uniting symbol として中国や日本の哲学的考察が紹介されており、東洋への関心がこの頃既に相当強かったことを示している。Jung は、「言うならば、外向性が西洋の『スタイル』であるように、内向性は東洋の『スタイル』であり、習慣的で普遍的な態度である」(Jung, 1939) と述べているが、東洋と西洋の相異をこのように把握することによって、当時としては西洋人にとって困難であった東洋理解を深いレベルまで押しすすめていったのである。彼はまた、アメリカ文化があまりにも外向性に片よりすぎていることを、しばしば指摘している。

3. Jung 以後の発展

まず、Jung の概念と、ユング派以外の研究者による類似の概念との比較について述べる。Hermann Rorschach が1921年、つまり Jung のタイプ論の出版されたのと同年に Psychodiagnostik を出版し、その中でロールシャッハテストの結果に基づく体験型 (Erlebnistypus) の判定について述べていることは周知の事実である。彼はロールシャッハテストにおける運動反応と色彩反応の比率からこれを決定するのであり、前者の多い場合を introversiv、後者の多い場合を extratensiv、と呼び、これらは Jung の理論とは無関係であると主張する。ところで Jung の Einstellungstypus と Rorschach の Erlebnistypus の関係については、Bash (1955) の意をつくした論文があるので、詳細はそれを参照されたいが、彼の結論は、両者の間には基本的な差がないということである。同論文で彼が Klopfer (1955) を引用して説明しているとおり、当時は Freud と Jung の両派は極めて鋭く対立していて、Rorschach は当時のスイスにおけるフロイト派の会長、Emil Oberholzer の弟子として、どうしても彼の理論を Jung のものから峻別する必要があったのであろうと推察される。筆者も Bash と同意見で、彼らの考えはほとんど類似のものと考えているが、そこでロールシャッハテストという投影法によって得た結果をどう考えるかについては、次に示すような研究結果と照らし合わせると、慎重に考えねばならぬ点をもっていると思う。この点については、Brawer & Spiegelman (1964) の研究がある。これは Los Angeles においてユング派の分析家に分析を受けた人に対して、それと独立にロールシャッハテストを施行し、体験型判定の指標とされる、 $M : \text{sum } C, (FM+m) : (Fc+c+C'), (\text{VII} + \text{IX} + \text{X}) \%$ を算出して、分析家による外向—内向の判定との相関を見たものである。46名の被験者が用いられ、分析家 (16名) の判定とロールシャッハ結果の相関係数が求められたが、それらはすべて 0 に近く、何らの相関関係も認められなかった。次節に紹介する田辺節子 (1976) の研究結果から考えても、ロールシャッハテストによる外向—内向の判定の意味については、今後、一層の研究と

考察を必要とするものと考えられる。

Hall と Lindzey が Theories of Personality のなかで価値ある実験と認めている Bash の研究を紹介する。Bash (1952) は、Jung によるタイプの相補性の理論に基づき、内向（外向）性の人は、無意識的には外向（内向）性によって補償されているので、被験者を睡眠に近い状態におくと、基本的態度の反転が生じるであろうという仮説をたてた。そこでロールシャッハテストの第IX図版を用い、普通の状態で反応させたときと、睡眠類似の状態において反応させたときとを比較した。そうすると、両者の間において注目すべき体験型の反転が生じることを認めたのである。この際に Bash は Rorschach の体験型を Jung の外向—内向の考えと同じものと考えて実験を行ったわけである。

Jung による向性と、Cattell による質問紙法に基づく人格因子との関係については、Marshall (1967) が論じている。彼は実験結果に基づくものではなく、むしろ、Jung のタイプ論における概念規定をより厳密に行おうとするものであり、そのために Cattell の研究結果と比較対照をこころみ、それによって、タイプ論の Conceptual analysis へと論をすすめているものである (Marshall, 1968)。彼は Cattell が見出した16の人格因子のなかで、M (autia) が (Jung) の向性と一致していると結論している。そして Cattell がM因子について見出している統計的結果を Jung のタイプ論研究に役立てることを提案している。Dicks-Mireaux (1964) も Jung のタイプ論と、Cattell, Guilford, Eysenck の理論とを比較、Jung の外向—内向の次元が、これらの質問紙法により見出された人格因子と深くかかわることを指摘している。なお、彼が治療者の解釈を受け入れる点で、内向型の方が外向型に優るのではないかと示唆しているのは、最近の研究に示されるような治療者—患者の適合性とタイプの関係を考える方向を示唆しているものと思われる。

Mann, Siegler, Osmond (1968) の共同執筆による論文は、心理機能と個人の時間に対するかわりについて興味深い説を述べている。すなわち、感情タイプは過去に、感覚タイプは現在に、直観タイプは未来に、それぞれ重きをおく傾向があり、思考タイプは、過去・現在・未来へとかわる時間の流れに関心をもつと考えるのである。これについて、歴史上の人物、文学作品などを素材として論じているのだが、この点を実験的に確める研究をこころみるのは価値あることと思われる。

次に、タイプ論と実際の分析場面、およびそこに生じる人格の発達（個性化の過程）との関連について述べたものは、Hillman & Franz (1971), Meier (1970, 1977), Groesbeck (1978) である。Hillman と Franz の著書は、共にチューリッヒのユング研究所における講義記録を基にしたものであるが、Franz は劣等機能の開発という主題が分析過程においていかに生じるかを、Jung のいう影 (Schatten, shadow) との関連において論じている。Hillman は現代の西欧社会においては思考機能に重きをおき、感情機能の重要性を忘れるための障害が生じることを指摘し、感情機能の意味とそれを発達せしめる点について論じている。Meier は既に紹介したようにタイプ論を特に重視する立場に立って、Jung の言う個性化の過程に従って、影のみではなく、Anima・Animus、自己などの概念と関連づけてタイプの問題を論じ切っている (Meier, 1977)。これはユング派の書物のなかでも特異なものであるし、価値の高いものである。Meier は分析場面における、分析家と被分析者の関係においても、タイプ論の観点から貴重な提言をし、それ

を、Groesbeek が押しすすめて論じている。その理論を簡単に示すと、分析家と被分析者とがまったく同じタイプであるときは、そこに何らの対極が生じないのでダイナミックな発展が生じて来ない。分析場面においては、両者の間に（意識的あるいは無意識的）何らかの対極存在があり、それを起点として心的エネルギーの流れが生じ、人格変化の過程が生じてくると考えられる。そこで、分析家は被分析者とタイプがあまりにも一致していると判断したときは、自分の態度を少し変えて、そこに何らかの対極関係が生じるように工夫しなくてはならない。そのような点について具体的に詳述しているのが彼らの論文である。これらの論文は実際に分析を行っている人々にとっては興味深く有用であるが、一般の心理学者にとってはあまり興味のないものであろう。

Klopfer と Spiegelman (1965) の論文は、心理療法における学派の相異をタイプ論によって説明しようとしたもので、これは最近におけるタイプ論に関する研究の先駆をなすものと思われる、貴重な論文であると考えられる。この論文は Meier の60歳誕生記念論文集に掲載されたものであり、Meier に教育分析を受けた Klopfer と Spiegelman が、Meier の分析の特徴を明らかにする意味においても論じたものである。彼らは外向―内向を考える上で、「患者の現実」と「治療の過程」という2次元

において考えることを提案した。そして、それぞれを図に示すように横軸・縦軸としてとると、4つの領域ができる。左上の領域は患者の外的現実（たとえば、症状）に目を向け、治療過程においても外的な面に注目してなされ、そこでは指示する（direct）ことが主たる技法となる。左下の領域は、患者の外的現実（たとえば、症状）に目を向けるが、治療過程としては患者の内的成長に焦点をあてるもので、相手の感情を反射する（reflect）ことが主となる。これらに対して、右側は患者の内的現実、つまり、夢や自由連想法などによる無意識界の探索に重きを

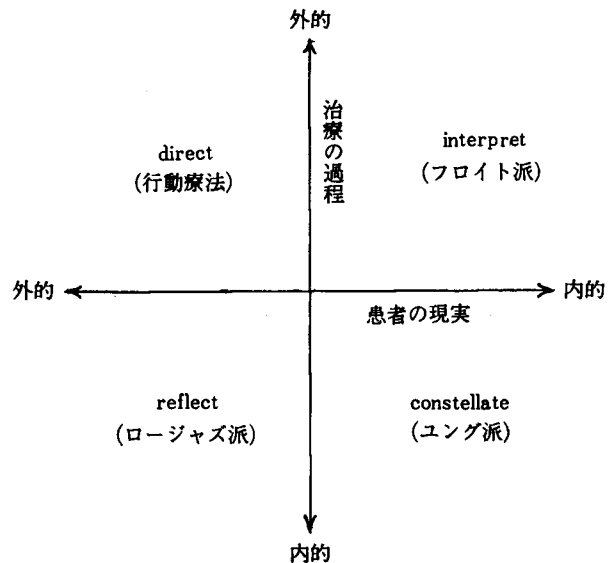


図2 心理療法における学派の相異

をおく。その上側では治療過程において、患者の対人関係の改変など外的な方に注目するので、解釈する（interpret）ということが主となる。これに対して、右下は患者の内的現実（たとえば、夢や自由連想法などによる無意識界の探索）に目を向け、治療過程においても内的成長を目指すことになる。ここでは、患者の自己実現の過程を布置する（constellate）ことが重要となる。以上の考えに従って、Klopfer と Spiegelman は、それぞれの領域に概当する代表的治療者として、Thorne, Rogers, Freud, Meier をあげている。筆者としては図に示したように、それぞれ、行動療法、ロージャズ派、フロイト派、ユング派の特徴を表わすものと考えた方が、より適切ではないかと思っている。

小川捷之および筆者らは上述の論文にヒントを得て、治療者の学派の相違と Jung によるタイプとの関連を見ようとした（小川他，1969）。これは Jung のタイプ論に基づくQカードによる

自己評定により、同一の治療技法を採る治療者に共通のタイプを見出せるか否かを検討したものである。当時はユング派の治療者がほとんどいなかったため、催眠療法家、カウンセラー、精神分析家、心理学者などに評定を依頼し、結果に因子分析をこころみ2つの因子を見出し得た。第Ⅰ因子はカウンセラーに特有の因子で、感覚、直観機能にすぐれ、非合理機能による治療者の因子であり、第Ⅱ因子は催眠療法家に特有の因子で、外向的合理機能を表わす因子であることが明らかにされた。小川ら(1970)は、同様の技法を用いて、学生活動家のタイプに関しても興味深い結果を得ている。

Kirsch (1979) は治療的な観点から、ユング派の分析家が一括して内向型の女性と呼んでいる人のなかで、Schizoid として特徴づける方が妥当な一群があり、それは分析関係の維持が困難である点から言っても留意すべきであると述べている。内向型の人是一般に人づきが悪いが、この人と思った人に対しては意味深い人間関係をもつことができるが、彼が schizoid と定義している人は、それさえも極めて困難であることが特徴的であると言う。治療の実際にたずさわる者に対しては有用な提言であると思われる。

4. タイプテストおよびそれによる研究

以上に紹介してきた論文は小川らの研究を除いて、すべて数量的なアプローチを含まず概念的、あるいは分析における実際的なことに関するものであった。しかし、Jung の考えを基にして、タイプの測定をこころみるテストが考案され、以後、それを用いての研究がなされはじめた。しかし、Mattoon (1977) がいみじくも指摘しているとおり、ユング派の人々は外向的感覚機能が劣等な人が多く、それを反映して、ユング派の人々による数量的研究は粗雑なものが多い。しかし、Mattoon の指摘などによって、この点は相当自覚され、最近注目すべき研究がなされつつある。それらの研究について、本節では展望をこころみたい。

現在用いられている Jung のタイプ論に基づくテストは二種類ある。それらは、1) Gray-Wheelwright test (以後、GWT と略記) 2) Myers-Briggs Type Indicator (以後 MBTI と略記) である。GWT は85項目の2件法による質問から成立っている質問紙である。MBTI は3部分から成立っており、第1部は71項目の2件法の質問、第2部は2語を1対として、どちらの語がアピールするかを選ばせしめるもので、25対の項目があり、第3部は第1部と同形式で43項目の質問より成立っている。GWT も MBTI も、まず外向-内向の判定を行い、次に4機能のうちのどれが主機能であるかを判定するのではなく、感覚-直観の軸 (Perception) と、感情-思考の軸 (judgment) を別々に取り扱い、それぞれ独立にどちらかの機能の優能性を判定する方法を取っている。従って、最終判定において、ある個人は、外向-感覚-思考型とか内向-感覚-感情型などのように判定されることになっている。従って、この方法によって8コのタイプが判定されるわけである。

GWT も MBTI も統計的にはあまり洗練されていないテストであり、その精密な検討は最近になってなされはじめた感があるが、GWT は1945年に、MBTI は1958年に発表され、その後は以下に示すような研究に用いられてきている。

Gray と Wheelwright は、GWT を発表後、1950年までに多くの研究を発表している。それらの文献は Bradway (1964) によって記載されているが、Gray & Wheelwright (1947) などによ

って察すると、GWT を施行した数量的な結果を示しているものが多い。この論文では、GWT によると、男女それぞれ 500 名の被験者に GWT を施行し、その年齢による差を見たものである。その結果、年齢と共に最も低下するのが直観機能であり、外向性も低下（従って内向が増加）、感情機能も除々にではあるが低下することを報告している。このような傾向は確かにある程度意味をもつが、この際、Norm ということについてどう考えるか、つまり 10 才から 80 までの被験者に同一のテストを施行し同一の規準で判定することの意味、あるいは、統計の結果において、平均値がそれぞれの軸の中央から相当にずれたものがあるのをどう考えるか、などについて反省がなされていないのが気になるところである。Stricker & Ross (1964) は、MBTI についての統計的検討を行っている。再テストによるテストの信頼性はまずまずの結果を示しているが、彼らは「タイプ」の存在という点から考えて、外向—内向などの軸における統計結果が bimodal になると予想し、それに反する結果を得たと報告している。この結果から、Jung のタイプ論に疑問を提出しているのだが、これは問題である。つまり、このことは MBTI が確実に Jung のタイプ論に基づいていることを前提としてこそ言えるのであり、その他の研究においても同様のことが認められるが、この点についてもっとつっこんだ議論が欲しいところである。田辺節子 (1976) は、男子大学生に対して GWT、および Eysenck の人格論に基づく MPI、ロールシャッハテストを施行し、その関連を報告している。その結果、GWT と MPI の E 尺度（外向—内向）は 0.678 の相関を示したが、これらの質問紙法による結果とロールシャッハテストによる判定とは何らの相関関係も見出せなかった。GWT の U-S 尺度（以後、直観を U、感覚を S で表わす）と、T-F 尺度（以後、思考を T、感情を F で表わす）との間に 0.399 の相関が認められた。このことは GWT を日本語に訳するために生じたことか、GWT そのものの多少欠陥によるものか、ともかく、T-F 尺度は Jung の理論によれば直交すべきであるので、今後の検討を必要とするものである。

なお心理機能とロールシャッハテストの関係では、F 尺度の高いものは色影反応が多く、S 尺度の高いものは形態反応が多いことが見出され、これは Mindess (1955) が予想していたことと一致している。

MBTI を用いて、タイプの差とその他の人格特性との関係を見ようとしたものに、Richek & Bown, Palmiere, Carlson & Love などの研究がある。これらは MBTI の construct validity についての研究とも見ることができる。Richek & Bown (1968) の研究は、MBTI と Rogers の人格論を背景に作られた Bown の Self-Report Inventory の各尺度との間に意味のある相関関係を見出したものである。Palmiere (1972) は外向—内向の差と TAT 反応との間に意味ある関係を見出せるかを、Spiegelman (1955) による示唆を基にして検証しようとしている。MBTI によりそれぞれ外向—内向と判定された被験者に対して TAT のなかの 6 枚の図版を見せ、話を作らせた後に、いろいろな項目についての質問紙に記入させている。たとえば、漠然とした人物像（図版 20）の場合であれば、この人は男性か女性か、その人の性格、行為などについてチェックするようになっている。このようにして、第 1 の仮説、内向型の方が外向型より空想の量は多いだろうという点は支持されたが、第 2 の仮説、内向型の方は anima/animus 像が多く出現するだろう、第 3 の仮説、空想内容については、自分の反対の型が（抑圧されているので）多く出現されるだろう、という点は明確な結果を得られなかった。この研究は TAT に質問紙法を

付加して行う方法などに新しい工夫が見られ、この点は今後も追求してゆく価値のあることと思われるが、仮説 2, 3 およびその検証法に認められるように、Jung の理論の理解に浅薄な点があり、そのために明確な結果を得られなかったものと思われる。

Bradway はタイプ論と ユング派の分析家の関係についての研究を継続して行っている。Bradway (1964) はカリフォルニア州における 28 名のユング派の分析家に対して、MBTI と GWT を施行し、各人が自分のタイプを自己判定したものと的一致性を見た。その結果外向・内向に関しては、自己判定と両テストの判定の間にほとんど完全な一致が見られた。両テストとも S-U 尺度において自己判定と有意な一致性を認めた。T-F 尺度においては、GWT においてのみ自己判定との有意な一致を認めた。なお、これは既述の Plant (1972) の結果とも一致するが、ユング派の分析家は、内向・直観タイプが圧倒的に多いことが明らかとなった。Bradway & Detloff (1976) は、上記の研究を大規模に押しすすめたもので、カリフォルニア州におけるユング派の分析家および候補者全体に対して GWT を受けるように要請し、92 名 (85%) の被験者を得た結果である。この結果は前記の研究結果と同様のことになったが、少し数値を示しておく、GWT で IUF (内向・直観・感情) と判定されたもの、ユング派の分析家は 30% に対して、統制群として一般人に行った GWT の結果では、6%, IUT 型はユング派 31%, 一般人 8% となっている。なお興味深いのは、一般人が、ESF 15%, EST 16% を示しているのに対して、ユング派ではそれぞれ、1%, 0% を示し、ユング派の人々がいかに外向・感覚機能に劣っているかを如実に示している。また、92% の被験者のなかには前記の研究において GWT を受けたものが 16 名あったが、この間においてタイプの変動はほとんどみられなかった。

Bradway & Wheelwright (1978) は、ユング派の分析家のタイプと、彼らの分析の技法との関連を見出そうとして興味深い研究を行っている。これは世界各地のユング派分析家、172 名に対して、GWT を施行すると共に、その技法に関する質問紙に記入を求め、その関係を明らかにしたものである。質問の第 1 は、被分析者として、うまく仕事ができる、なるべく引き受けないようにしている、という分類に対して、子供、精神病、老人、死期を迎えている人……などについて尋ねてゆくものである。つまり、このような分析における得意・不得意とタイプの関連性があるかを見ようとするものであるが、この結果は、感覚タイプが Character disorders に、直観タイプが思春期にうまく仕事ができる点で有意の差を示すことが解った。なお、タイプとは関係ないが、172 名の分析家中、Psychotic とうまく仕事ができると答えたもの 35%, 引き受けないようにしているもの 40% である。引き受けないようにしている項目の最高は Alcoholic 63% であった。第 2 の質問は分析中に用いる技法として、夢分析、絵画表現、箱庭療法、その他について尋ねるもので、分析中の解釈において、Archetypes, Transference, Typology などをもどの程度に取りあげるかという項目もある。この結果は、外向型の人が多く用いるものとして有意の差が見られたもの、Verbal Art Forms, Intense relationship, Typology の利用、多い傾向を示しているもの、Diaries, Comforting by touch, Astrology である。直観型に有意に多いものは、Role Playing, Non-verbal Art Form である。次に、第 3 の質問は、分析家自身が行うか、あるいは他の治療者に紹介して行って貰い効果があると判断しているものとして、Family therapy, Group therapy, Marathon therapy などあげているものである。この結果、直観型に有意に多いもの、Family Therapy, Group Therapy, Body involvement techniques, Marathon therapy であった。この

ような研究は、これから心理療法の実際を考えてゆく上で有用で興味深いものと思われる。ただ、これをユング派の分析家内で行っているのだから、この場合も、内向・直観タイプが多いので、統計処理の際にその点がどのように扱われたのか疑問があるし、もっと他学派まで拡大して調査する方が、結果も明確に出て面白いことと思われる。

最近になって、Meier & Wozny (1978) は GWT に対する疑問を提出している。Meier らはスイスおよびドイツにおけるユング派の分析家22名に対して行った GWT の結果と自己判定の結果を調べると、僅か6名しか一致せず、他の16名は不一致であった。そこで得られた結果に Q-technique による因子分析を行ったが、それによって得た3因子が必ずしも Jung の考える E-I, S-U, T-F に一致しないことを明らかにしている。先述の田辺 (1976) の結果においても示したように、GWT の S-U の項目と T-F の項目は互に関連して、それほど強い判別力を持たないのである。ところで、これに対して Quenk (1979) は、分析家の自己判定を妥当性の根拠とする誤りを指摘し、ユング派の人は外向一感覚機能が劣等なために数量的研究が下手であることを指摘し、われわれは construct validity の考えに従って研究すべきことを提唱している。筆者もこの意見に同感であるが、今まで無批判に使用されてきていた GWT に対して、統計的批判が生じてきたことは歓迎すべきことであり、GWT にしても MBTI にしても、そのテストの構成そのものについて統計的検討を加え、洗練されたものとすべきであると思われる。

心理療法において、最近では理論的な差のみでなく、多くの異なる技法が開発され、数え切れぬほど多くの異なった心理療法が存在している。そして、それらが各自の方法や理論の正しさや長所を述べたて、時には論争も行われてきたが、最近ではそれぞれの学派が特徴をもち、それにふさわしいクライアントが存在するのではないかと考えられてきた。つまり、クライアントの要求や特性などにより、それにふさわしい治療法があるのであって、どの治療法が常に正しいとか優位であるとか考えないわけである。このような考えに基づいて、治療者（あるいは教育者）とクライアント（生徒）との関係を明らかにしてゆく上で、Jung のタイプ論が相当に用いられてきている。Witzig (1978) の研究がその典型例で、なかなか興味深いものである。彼が同論文で紹介している諸研究は、博士論文などもあり原論文を参考にはできなかったが、われわれが今後の研究を考えてゆく上で示唆するところが大きいと思われるので、Witzig の紹介に従って、ここに少し述べておくことにする。Di Lorento (1971) はグループ療法における systematic desensitisation, client-centered, rational-emotive technique の方法を比較して、外向型には Client-centered, 内向型には systematic-desensitisation, rational-emotive technique が有効であると結論している。Jordan (1972) は、新任教師の訓練のためのグループ研修において、外向型は内向型よりグループ体験にはいりこむ度合いが強い。しかし、内向型でもそこにはいりこんだものは外向型と変りはない。集団活動のための何らかの技法を用いると、内向型は外向型、中間型に比して、明らかにそれに乗りにくいことを述べている。また、Toobert (1965) はグループメンバーの交流は、最初のうちは外向型の人に多くみられるが、終りの方になると内向、外向共に変りはないと述べている。Schubert (1971) は Eysenck の考えに基づいているが、T-group において、内向一神経症タイプのメンバーが増えると、抵抗が増大するが、外向一神経症タイプの人には、グループメンバーの交流をより促進することを明らかにしている。グループに関するこのような研究は他にも見られるが、方法上の困難さもあって、個人療法に関してはこのような研究が

認められないのは残念である。

ユング派の分析家に内向・直観型が多いことは既に述べたが、その他の学派はどうであろうか。これに答えるものとして既述の小川ら (1969) の研究があったわけであるが、Witzig の紹介によると次のようなものがある。ユング派に内向・直観型が多いことは既に述べたとおりだが、これに反して、Levell (1965) の研究によると、高等学校の学校カウンセラーは73%が外向型である。また、MBTI によると、カウンセラーのなかで有用なカウンセラーは直観・感情の軸により方向づけられているとのことである。Durfee (1971) によると、援助的な職業を専門にしようとする学生たちは、MBTI によると、より直観優位のものが多い。ここで心理学専攻学生は直観・思考型であるのに対して、社会福祉専攻学生は直観・感情型、医学生は顕著に直観型となっているのは興味深い。わが国でやってみて果してどうなるであろうか。また Witzig は自分自身の研究として (Witzig, 1976)、オレゴン州の公立精神衛生クリニックにおける102名の専門家に MBTI を施行した結果を述べている。これによると、心理機能としては、直観44%、思考31%、感情17%、感覚8%となっている。これを Plaut が調査したユング派の分析家の、直観54%、感情31%、思考12%、感覚9%と比較すると、思考と感情が入れ代っているが相当に似通っていると感じられる。両者の差はむしろ基本的態度の方に存在し、オレゴンでは58%が外向的で、むしろ外向の優位を示している。

Mendelsohn (1966) は、201対のカウンセラーとクライアントに MBTI を施行し、両者のタイプの類似度が高いほど、カウンセリングプロセスの期間も回数も増加し、関係の良さを示すと報告している。これはカウンセラーとクライアントの間の関係の在り方をタイプの差によって見ようとする試みで、極めて注目すべきものと思われる。Witzig はこれを一歩進めて次のような研究を行っている。

Witzig は Jung の4機能に相応するように、心理療法をまず分類し、MBTI の項目などから、4機能をそれぞれ優位とする人物像の記述を行い、このようなクライアントが来たとき、どのような心理療法が向いていると思うかを、オレゴン州の公立精神衛生クリニックにおける102名の専門家に質問して、その結果を検討している。Witzig は Jung による4つの心理機能と心理療法の関連を次のように考えている。

思考機能: これは informational/cognitive な面に重きをおく治療で、Psychoanalytic, rational-emotive, educational, transactional approach がこれに相当する。

直観機能: symbolic/intuitive な面に重きをおくもので、これは空想、瞑想、brainstorming などを強調する治療で、ユング派の分析もここにはいるだろう。

感覚機能: sensory/experimental な面に重きをおくもので、ゲシュタルト、bio-energetic, behaviour modification などがここにはいる。

感情機能: confrontation/conative な面に重きをおくもので、T-group, client-centered, などがここにはいると思われる。

Witzig は以上のように心理療法を分類し、次にそれぞれ、内向、外向、思考、直観、感覚、感情の型をあらわす仮のクライアント像を記述し、そのようなクライアントが来たときに、どの療法がよく適応すると思うかを専門家に尋ねたのである。この結果、まったくぴったりにないが、彼の仮説のように、クライアントをそれと似た属性をもつ治療に紹介する傾向が認められた

のである。

Witzig の研究は心理療法と心理機能との関連づけにやや強引なところがあり、それは特に感覚機能のところに感じられるが（この結果は仮説どおりには出ていない）、クライアントの性格によって、それにふさわしい治療法を考えようとする試み、および治療者とクライアントとの間のいわゆる「相性」を考えようとする試みとして、示唆するところが大きい。ここに、Jung のタイプ論を用いているところも興味深い。

5. 今後の課題

以上に展望を試みてきたように、Jung のタイプ論は、しばらくの間アカデミックな心理学にあまり取り入れられなかった感があったが、1970年代になって、治療者とクライアントの関係や、教育者と生徒の関係などを見てゆく指標として見直され、興味深い研究結果を生み出している。おそらくこのような方向の研究は今後も続けられてゆくであろうし、わが国においても、同様の研究をもっと盛んにしてゆくべきと思われる。

Meier が指摘しているように、ユング派の分析家にとって、タイプ論は実験心理学者と共通の場をもつにふさわしいものなので、今後ますます研究を続行すべきであると思われる。ただ問題は、既に指摘してきたように、GWT にしても MBTI にしてもテストとして洗練されたものとなっていないので、その統計的検討から手をつけるべきだと思われる。さもなければ、それらの方法を用いてする研究の意味が不明確となるからである。このような統計的な検討によって、テストそのものの構成をより精度の高いものとするのが大切であるが、Jung 自身のもともとの考えとの関連という点になると、もっと問題は難しくなると考えられる。

Meier は、タイプ論と Individuation の関連を説き、Jung もそれを喜んだという。しかし、Jung の考えによれば、外向的（内向的）な人は、Individuate されるに従って、その内向的（外向的）な面を開発させてくると考えられている。このことは、心理機能についても同様である。ところが、現在の GWT, MBTI ではその過程を測定することはできない。つまり、外向－内向、直観－感覚、思考－感情は両立し得ないものとして測定されているからである。そこで、われわれが真に Jung の理論を生かしてゆこうとするならば、両立し難いものを両立させる人間存在に注目し、果してそのようなことは数量化可能であるのか、数量化するならばいかなる方法があるかなどを検討し、それに基づいて、タイプの測定法を考えるべきではなかろうか。これは極めて困難なことであるが、真剣に追求すべき課題であると思われる。

上記の点はあまりに困難なことであり、しばらくおくとして、GWT, MBTI 形式の質問紙法に頼るとしても、これはどこまで Jung の本来的な考えを反映しているものであるかについて、常に反省することが大切であろう。

Jung のタイプはそこに何らの価値観を含まず、しかも、各タイプ間の相補性を強調しているので、治療者とクライアントの関係の研究にとどまらず、今後は、夫婦や職場内における人間関係、その組み合わせによって生じる利点と欠点などを知る上において、強力な手がかりを与えてくれると思われる。あるいは、職業選択の上においても興味ある特徴を示すかも知れない。

なお、既に Jung が東洋と西洋を、内向－外向の差によってみようとしたように、異文化間における価値観や世界観の相違などを理解する上で有効性を発揮することも考えられる。この点、

国際比較を試みることも興味深いと思われる。

〔文 献〕

1. Bash, K. W. (1952). Zur experimentellen Grundlegung der Jungischen Traumanalyse. *Schweiz Z. Psychol. Anwend.*, 11, 282-295.
2. ——— (1955). Einstellungstypus und Erlebnistypus: C. G. Jung and Hermann Rorschach. *J. Proj. Tech.*, 19, 236-42.
3. Bradway, K. (1964). Jung's psychological types: classification by test versus classification by self. *J. analyt. psychol.*, 9, 2, 129-35.
4. Bradway, K. Detloff, W. (1976). Incidence of psychological types among Jungien analysts classified by self and by test. *J. analyt. psychol.*, 21, 2, 134-46.
5. Bradway, K. Wheelwright, J. (1978). The psychological type of the analyst and its relation to analytical practice. *J. analyt. psychol.*, 23, 3, 211-25.
6. Brawer, F. B. Spiegelman, J. M. (1964). Rorschach and Jung: a study of introversion-extraversion. *J. analyt. psychol.*, 9, 2, 137-49.
7. Detloff, W. (1972). Psychological types: fifty years after. *psychol. perspective*, 3, 62-73.
8. Dicks-Miriaux, M. J. (1964). Extraversion-introversion in experimental psychology. *J. analyt. psychol.*, 9, 2, 117-28.
9. Di Lorento, A. O. (1971). *Comparative psychotherapy*. Chicago, Atherton press.
10. Durfee, R. (1971). Personality characteristics and attitudes towards disabled by students in health professions. *Rehab. couns. bull.*, 15, 35.
11. Fordham, M. (1972). Note on psychological types. *J. analyt. psychol.*, 17, 2, 111-15.
12. Gray, H. Wheelwright, J. (1945). Jung's psychological types, including the four functions. *J. gen. psychol.*, 33, 265-84.
13. ——— (1964). Jung's psychological types, their frequency of occurrence. *J. gen. psychol.*, 34, 3-17.
14. Gray, H. (1947). Psychological types and changes with age. *J. clin. Psychol.* 3, 273-77.
15. Groesbeck, C. J. (1978). Psychological types in the analysis of the transference. *J. analyt. Psychol.*, 23, 1, 23-53.
16. Hall, C. Nordby, V. J. (1973). *A Primer of Jungian Psychology*. Taplinger.
17. Hillman, J. Franz, von M.-L. (1971). *Lectures on Jung's Typology*. Spring Publications.
18. Jordan, M. B. (1972). An exploratory study of the differential effects of group experiences in relation to the multiple factors of personality involvement and commitment. (Ph. D. dissertation, St. Louis University) in *Diss. Abst. Int.*, 333, Sept. 1972, 956-A.
19. Jung, C. G. Riklin, F. (1904). Experimentelle Untersuchung über Assoziationen Gesunder. *Journal f. Psychol. u. Neurol.*, Bd. 111, 55-83.
20. Jung, C. G. (1913). Contribution a l'etude de types psychologiques. *Arch. Psychol.*, XIII, 289-99.
21. ———, (1921). *Psychologische Typen*. Rascher Verlag.
22. ———, (1939). Psychological commentary on "The Tibetan Book of the Great Liberation", in *Psychology and Religion: West and East, The Collected Works of C. G. Jung*, Vol. 11, Pantheon Books, Inc.
23. ———, (1964). *Man and his Symbols*. Aldus Books Ltd.
24. ———, (1971). *Psychological Types. The Collected Works of C. G. Jung*, Vol 6, Routledge & Kegan Paul.
25. Kirsch, J. (1979). Reflection on introversion and/or schizoid personality. *J. analyt. Psychol.*, 24, 2, 145-52.
26. Klopfer, B. (1955). Analytische Psychologie. Ichpsychologie und Projective Methoden. in *Studien zur analytischen psychologie C. G. Jung*. Rascher Verlag.

27. Klopfer, B. Spiegelman, J. M. (1965). Some dimensions of psychotherapy. in *Spectrum Psychologiae* Rascher Verlag.
28. Levell, J. P. (1965). Secondary school counsellors: a study of differentiating characteristics. (Ph. D. dissertation, University of Oregon) in *Diss. Abs. Int.*, 26, 1966, 4452.
29. Mann, H. Siegler, M. Osmand, H. (1968). The many worlds of time. *J. analyt. Psychol.*, 13, 1, 33-56.
30. Marshall, I. N. (1967). Extraversion and Libido in Jung and Cattell. *J. analyt. Psychol.*, 12, 2, 115-36.
31. ———, (1968). The four functions: conceptual analysis. *J. analyt. Psychol.*, 13, 1, 1-32.
32. Mattoon, M. A. (1977). The neglected function in analytical psychology. *J. analyt. Psychol.*, 22, 1, 17-31.
33. Mendelsohn, G. A. (1966). Effects of client personality and client-counsellor similarity on duration of counselling. *J. couns. Psychol.*, 13, 2, 228-234.
34. Meier, C. A. (1970). Individuation und Psychologische Typen. *Z. analyt. Psychol.*, 1, 2.
35. ———, (1971). Psychological Types and individuation: a plea for more scientific approach in Jungian psychology. in *The analytic Process: aims, analysis, training*, (ed. Wheelwright, J. B.) Putnam's, 276-89.
36. ———, (1977). *Persönlichkeit: Der Individuations-prozess im Licht der Typologie C. G. Jung*. Walter Verlag.
37. Meier, C. A. Wozny, M. A. (1978). An empirical study of Jungian typology. *J. analyt. Psychol.*, 23, 3, 226-30.
38. Mindess, H. (1955). Analytical psychology and the Rorschach test. *J. proj. Tech.*, 19, 243-52.
39. Myers, I. B. (1962). *Myers-Briggs type indicator*. Princeton, Educational Testing Service.
40. 小川捷之・河合隼雄・原野広太郎・伊東恵子・小川洋子。(1969) 心理療法における治療者のタイプと治療技法, 臨床心理学研究, 8, 3, 165-76.
41. 小川捷之, 市村操一, 佐野千代子。(1970) 学生活動家のタイプに関する一考察—成分分析による検討—, 心理学評論14, 1, 80-104.
42. Palmirer, L. (1972). Intro-extra-version as an organizing principle in fantasy production. *J. analyt. Psychol.*, 17, 2, 116-31.
43. Plaut, A. (1972). Analytical psychologists and psychological types: comment on replies to a survey. *J. analyt. Psychol.*, 17, 2, 137-51.
44. Post, van der L. (1976). *Jung and the Story of Our Time*. The Hogarth Press.
45. Quenk, N. L. (1979). On empirical studies of Jungian typology. *J. analyt. Psychol.*, 24, 3, 219-25.
46. Rischek, H. G. Bown, O. H. (1968). Phenomenological correlates of Jung's typology. *J. analyt. Psychol.*, 13, 1, 57-65.
47. Rorschach, H. (1921). *Psychodiagnostik*. Bern. Ernst Bircher.
48. Schubert, P. W. (1971). Personality type self-perceived change resulting from sensitivity group experience. (Ph. D. dissertation, Purdue University) in *Diss. Abst. Int.*, 32A, Feb. 1972, 4360A.
49. Spiegelman, M. J. (1955). Jungian theory and the analysis of thematic tests. *J. proj. Tech.*, 19, 253-63.
50. Storr, A. (1973). *C. G. Jung*. Fontana/Collins Inc.,
51. Stricher, J. S. Ross, J. (1964). An assessment of some structural Properties of the Jungian personality typology. *J. abn. and soc. Psychol.* 68, 1, 62-71.
52. 田辺節子 (1976)。ロールシャッハテストと MPI, 及び人間タイプテストの比較, ロールシャッハ研究 XVIII, 73-87.
53. Toobert, S. (1965). The relation between personality and interaction behaviour in small groups. (Ph. D. dissertation, University of Oregon), in *Diss Abst. Int.*, 26, 1966, 4452.
54. Wheelwright, J. B. Wheelwright, J. H. Buehler, J. A. (1964). *Jungian Type survey: the Gray-*

京都大学教育学部紀要 XXVIII

- Wheelwright test manual* (16th revision) Society of Jungian analysts of Northern California.
55. Wheelwright, J. B. (1972). Critical notice of C. G. Jung's Psychological types. *J. analyt. Psychol.*, 17, 2, 212-14.
56. Witzig, J. S. (1976). A study of relationship between Jung's typology and therapeutic modality. (Ph. D. dissertation, University of Oregon) in *Diss. Abst. Int.*, 37, 12, 1977, 7553-A.
57. ———, (1978). Jung's typology and classification of the psychotherapies. *J. analyt. Psychol.*, 23, 4, 315-31.